

1 合同巡検

- ・対象学年 1 学年
- ・実施期日 令和3年7月12日～13日
- ・志教育にかかわるねらい (◎かかわる・○もとめる・○はたす)

集団行動を体験させることにより、集団生活のルールや公衆道徳、及び対人関係のあり方などを学ばせるとともに、宿泊体験などを通して、生徒と教師コミュニケーションを深める。

合同巡検はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）活動及び学校設定科目「学術研究Ⅰ」の一環としての意味合いが大きい行事である。生徒の興味関心に応じて班分けをし、野外観察実習を行い、生物観察の基礎技術習得と研究課題発見力を養い、発表を通じ情報の収集・分析・活用する能力を養うことを大きな目的としている。人文社会分野では、震災伝承館と魚市場を訪問することで海がもたらす災害と恵みを理解することで、1つの事象が多様な面を持つことを学んでいく。これらの内容は志教育の目的も果たしている。

【具体的な学習・活動の流れ】

今年度から巡検場所を気仙沼方面とし、入学後すぐから活動は開始される。昨年度の実践を参考に、興味関心に応じての班分け、研究内容の設定、野外観察実習を行いながら情報の収集・分析・活用を行い、まとめのレポート、発表会まで行う。以上の一連の流れの中で、自分が他者とかかわることの意味や、外部の指導者に情報を求めること、自分の役割を果たすことなどを学ぶことができた。

2 OB・OGによる講演会

- ・対象学年 1・2 学年
- ・実施期日 2年 令和3年9月2日 ・ 1年 9月3日
- ・志教育にかかわるねらい (○かかわる・◎もとめる・はたす)

現役大学生の講演により、難関大・難関学部で学ぶことの意義を理解し、自らの在り方・生き方についての考察を促す。

【具体的な学習・活動の流れ】

2年生本校を卒業した現東北大学生を招き、1時間講話をしていただく。生徒は、12の学部学科の中から自身の将来の希望に合わせてひとつ選び話を聞く。講話の後半には質問時間を設け、生徒自らできる限り多くの情報を得るようにした。

1年生本校を卒業した東京大学と京大学生を招き、5、6校時2時間連続で講話をいただいた。5校時目は講話、6校時目は在校生からの質問にOB・OGが答える形で話を聞いた。

生徒にとって講師が卒業生であるため、遠慮なく情報提供を求めることができ、また、自身の現状とより具体的に重ね合わせることができる機会でもある。講演後の感想を見ても「自身の進路をより深く考える有意義な機会であった」「日常的な努力の大切さをより知った」「視野を広くもつことの

大切さを学んだ」等の感想が寄せられ、人とかかわり様々な情報を求めることの大切さを学べた。

3 学術研究

- ・実施学年 2 学年 ・ 1 学年
- ・実施期日 令和 3 年度 通年で行う
- ・志教育にかかわるねらい (○かかわる・◎もとめる・○はたす)

本校では平成 24 年度から、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール (SSH)」の研究開発校の指定を受け、今年度は第 2 期目の 4 年目の研究活動を進めている。その事業の一環として「1 学年 学校設定科目 学術研究 I」を行っている。

【具体的な学習・活動の流れ】

2 年生 1 年生 1 1 月から始まった研究活動を「学術研究 II」という形で引き続き実施する。生徒の中には自らの研究を深め、よりよい発表にしようと文献調査やアンケート調査を実施するなど、積極性が見られた。1 1 月のポスター発表、1 2 月の口頭発表を通して各ゼミの代表班が決まり、3 月に若林区文化センターで全校生徒の前で発表し、その中から全国大会への代表を決定する。他の班の発表の際には積極的に質問が出され、この取り組みの中で本校が目指す「健全な批判精神」の育成に寄与している。

1 年生 年度当初より週に 1 時間、時間割に組み込んだ時間帯で研究を行う。前半はプレ課題研究と称し、1 年時の後半からの本格的な課題研究に向けた準備を行う。テーマ設定の方法や文献調査の方法などの基礎的な技術を学びながら、実際にテーマを設定して 9 月上旬に発表会を持った。

9 月後半からは各ゼミに分かれ、改めて構成したグループ毎に研究を進めている。1 年半かけて研究を深め、2 年生末に研究の成果を発表する。

学術研究 I は探究型課題研究である。生徒の問題解決能力を高めるために、生徒自身が解決すべき問題を自分の事として認識し、自身の選んだ研究手法や見いだした研究方法によって解決するよう場面設定を行っている。発表会の取り組みは、その過程において、生徒自身に成功 [失敗] 体験を得させ、同じ志向を持つ生徒たち (同級学年・上級下級学年) との交流、また参観する大学教員・中学高校教員、管理・研究機関の職員、そして地域・保護者との相互交流をすることによって、生徒の持つさらなる興味・好奇心を高めるとともに、文系理系に関わらず、どのような研究分野であっても科学的な知識や科学的思考法が必要であるという認識を持てるようにするねらいに基づき設定したものである。